

# 市内の石仏を訪ねて

島田 宇一

## はじめに

福生市内の石仏（石塔なども含めて）は、新田開発がすすむにつれて集落人口の増加し始める元禄時代以後のものが多く、その分布も玉川上水を挟んで東側と西側、それに近世の集落周辺に限られています。青梅線の東側には五丁橋の脇に万壺塔（造立年不詳）が一基あるだけです。福生の集落の発展が、水の便のよい多摩川べりから始まって東の方にのびてきたのがわかるような分布を示しています。

市内の石仏の数は、個人墓地の墓石などを除いて百体前後だと思えますが、正確には数えてありません。したがってその種別も余り多くなく、お地藏さん・馬頭さん・庚申さまなどが主なものです。

石仏は、一体一体が先亡の人たちの生活と信仰の中から

生れたものであるだけに、その銘文などから福生市の史料に欠けている所に資料を与えたり、幾百年もの昔に生きた苦闘の跡や敬虔な生活の実態を今も私たちに語りかけてくれる貴重な文化遺産です。市民の誰もがこれらの遺産を大切に、深い愛情と理解を持って永く保存のために努めて欲しいと思います。また、石仏や石塔の研究にはそれぞれ専門の知識が必要であり、その解説にも難解な点が多いのに、私のような素人が好事家として市内の石仏を訪ね廻ったことを発表するなどとはおこがましいのですが、何かの御参考になればと念願するだけです。

### 一、地藏菩薩

地藏信仰は、極楽浄土の信仰や末法思想が平安期に流布され、鎌倉・室町時代にはさらにそれが民間の信仰にまで

浸透してきました。日本霊異記などには、閻魔王の本地仏

として冥府に迷う亡者を濟度したり、現世利益を功德とした靈験談が数多く見られます。私たちには、お地藏さんという親しみのある呼びかたがピッタリとする仏さまで、今もなお宗派を超えて深い信仰の対象になっています。また、いろいろの名称をつけて〇〇地藏などと呼ばれるほど身近にいるお地藏さんで、そのお姿は經典や儀軌にはとらわれない立像や坐像が多く作られています。尊像は、仏さまの階級(?)で言うくと菩薩でありますから、身にはいろいろな莊嚴具をつけなければならぬのですが、ただ頭をまるめて法衣を着るといふ簡単なお姿をしているのは、衆生が近づきやすい慈悲の姿をあらわしていると言われています。

#### 覆地藏

清岩院の田村家の墓域に在ります。舟形光背を

負い、右手に卍を持ち(左手破損)一・五米余の立像です。

光背に万治二年(一六五九)の造立銘があり、市内最古の大型のお地藏さんです。容顔に、慈悲のまなざしをたたえ



覆地藏一万治2年(1659)  
(清岩院墓地)

ています。

#### 延命地藏

旧宝蔵院と千手院の牛浜墓地にあります。共に立像で、光背はなく、宝蔵院のは寛延二年(一七四九)、

千手院のものは享保元年(一七一六)の造立で両二体とも覆屋に安置されています。なお、坐像としては福生院の墓地入口の六地藏と並んで、年号不詳のものが一体と清岩院墓地の万霊塔のあるものが秀れ、その他大小、新旧のものが個人墓地のそこそこに見られます。

#### 六地藏

六地藏の信仰は、平安末期頃の成立らしいことは今昔物語などから推定されますが、正式の經典の根拠も

はっきりしないとされ、信仰の内容から十王地藏經によって成立したものでしょうか。生前に悪業を犯し、冥府に行き、閻魔王の裁決を受けて六道に転生しようとする亡者を濟度するために、地藏菩薩の本願から分身して六地藏の信仰が成立したと言われていますが、その六体の組合せや持物などは宗派によって違うようです。建立の場所は、寺の参道か墓地の入口などに多いようです。市内の寺にも、それぞれ六地藏がありますが、文化十三年(一八一六)仲夏円満日の銘が光彩を添えている千手院境内の六地藏が秀れ、今は覆屋の中に安置されています。

#### 車地藏

清岩院の境内、六地藏の隣にあって一見灯籠を

思わせ石幢のような四角柱形の珍しい型をしています。上部の三面には、各二体ずつ立体の尊像が浮彫にされ、西に

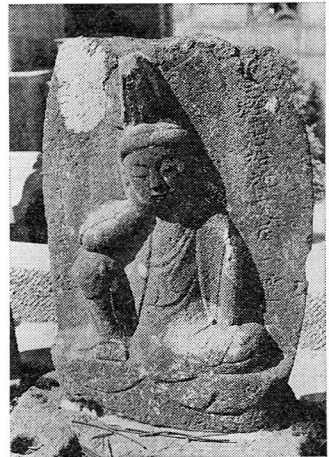
面して一体があり、合せて七尊像になっています。これを、なぜ車地藏と呼ぶのか謂れははっきりしていません。四面七体地藏とも呼べば、現実的にはっきりするかも知れませんが、それでは何だかご利益が少なくなるような気がします。

**五輪地藏** 真福寺にあります。板塔婆形の五輪塔に尊像を浮彫したもので、一米ばかりの立像で銘文は読解できません。この種のお地藏さんは、市内で唯一基だけです。真福寺改修の前は、参道に立っていたのですが、今は本堂の廊下に転がされています。無任の寺の衰れをとどめたそのお姿に思はず手をあわせました。

**おその地藏** (神明社墓地入口)・**北向地藏** (内出共同墓地の西側) 両尊とも香華の絶えない市民の信仰の篤いお地藏さまでありますが、後者の北向地藏には寛政八年(一七九六)の銘があります。

## 二、観音菩薩

法華経の第二十五巻に説かれている観世音菩薩普門品、俗に観音経と呼ばれる経文の主尊で、地藏菩薩に劣らず庶民、ことに女性の信仰の心の奥深く浸透している仏さまです。この観音さまの信仰も、平安の頃から流布されていたというのは、日本霊異記や枕草子などからも推定できます。観音さまは、その経文によるとすべての衆生を済度するた



如意輪観音  
(宝暦年間 1751~63)

めに、時に応じて三十三の姿に変化して現われると言われ、衆生がいろいろの苦悩に遇ったとき一心に観音の称名をとなえると、その音声に感じて助けの手を差し伸べて苦難から逃れることができるという有難い仏さまと言われています。変化観音の中で、私たちによく知られているのは、聖観音とか千手観音・十一面観音などですが、市内の石仏としては、聖観音・馬頭観音・如意輪観音に限られているようです。

**如意輪観音** 意のままに現われて六道に苦しむ衆生を済度し、利益をもたらしてくれる仏さまとされ、江戸時代から深く民間の信仰に取り入り、特に女人の盛大な信仰を受けました。日待講や念仏講の主尊とされたり、個人の墓石にも多く見られ、またその半伽思惟の姿で右手で頬をおさえて思惟するようすから、虫歯の痛みをおさえているように

見えるので、むしろの神様などと子供の時に言っていたのを思い出しました。市内の墓地に、巧緻さまざまなお姿が見られます。

**馬頭観音** いろいろな変化する観音の中で馬頭観音だけは、恐ろしい怒った相（忿怒相）をしています。馬が牧草を食うように、生老病死の苦しみやいろいろの悪種を食いつくしたり、千里の先に居る慈悲では教化し難い強情な衆生を馬の速さで馳けて行き、怒の姿で濟度しようとする仏さまで、本来は宝冠に馬頭をいただいています。この信仰は遠く天平時代後期には知られていたといわれ、後世になり馬が交通や農耕などに使われるようになると、愛馬の守り神や馬夫たちの守り本尊などとなり、馬が定命や事故などで斃れたりすると、路傍や屋敷内にその供養塔として建てられるようになりました。像刻型のもは、市内にはなく文字塔ばかりで江戸期ばかりのもです（個人の屋敷内のもは除く）。

馬頭観世音 文化三年<sup>丙寅</sup>（一八〇六） 清岩院門前

馬頭観世音 文政十一年（一八二八） 福生不動尊

馬頭観世音 弘化三年（一八四六） 福生院

**聖観音** 観音菩薩の変化しない前の、本然の姿の観音さ  
んです。新しいものですが、福生不動尊に一体あります。  
その他は、個人の墓石として使われているものが、墓地に  
は数体散見されます。

### 三 明王

明王は、呪文を唱えて押んだとき最も効験のある仏さまで、王と言ってもよい程の仏と言う意味で、密教哲学が理論的に生み出した仏で、大日如来の使者と言われています。五大明王がいて、金剛界曼荼羅<sup>マントラ</sup>の中央と東西南北に配せられています。明王は、教化の難しい衆生を折伏して濟度するために何れも忿怒身に変化しています。中でも私たちに馴染の深いのは、不動明王です。

**不動明王** 大日如来の使者で、悪を断ち善を修するといふ五大明王の中のお不動さんは、右手に剣、左手に索を持ち後背に焰光を帯び、矜羯羅童子、制吒迦童子の二体を脇侍として三尊形式のものがあります。市内ではただ一基の像型の不動明王があり、稚拙の妙と言うか心の惹かれる石仏です。小型ですので、盗難を恐れて写真だけで紹介して



不動三尊像



倶利伽羅不動文字塔  
(長徳寺墓地)

おきます。

#### 倶利伽羅不動

聞きなれない方もあるかも知れませんが、宝剣に竜王が巻きついて空を仰視しています。滝口や清水の湧出する辺に水神として祀られるものが多いのですが、市内には永昌院に近頃建てられたものがあります。なお、文字塔では長徳寺墓地に二基あり、これがどうして個人墓地にあるのか、ちょっと考えましたが大変珍しいものと思えます。

#### 四塔

梵語のstupaを訳して卒塔婆という漢字が当てられ、さらにそれを略して塔婆または塔と言われるようになったと伝えられています。本来は、仏舍利や経巻などを納めて霊地を示したものだそうですが、塔形を変形されたり、石

造物となったりして、時代とともに定形が崩れて多様化されました。塔の種類には板碑・塔婆・印塔・五輪塔・五重塔(三重塔、層塔、多宝塔)など多種にわたっています。その中で石仏の部類には、板碑・層塔・宝篋印塔・五輪塔・庚申塔などを挙げて、市内の塔をご案内しましょう。

**宝篋印塔** 鎌倉時代以降には、それまでの木材が石材で作られ、いわゆる石造塔婆となり武士や上層階級の人たちの供養塔として造られるようになり、さらに江戸時代になると形も初期のものから少しずつ変形(基礎と塔身が大きくなる)したり大型化したりして来て、幕末に向っては武士以外にも庶民の中の名だたる人の墓標にもなりました。

長徳寺の墓地に、田村家の大型の宝篋印塔があります。高さは、二米に及ぶような市内随一の大型のものですが、古いものではありません。小型で古いものが、市内墓地に数基ずつが散在して見られます。

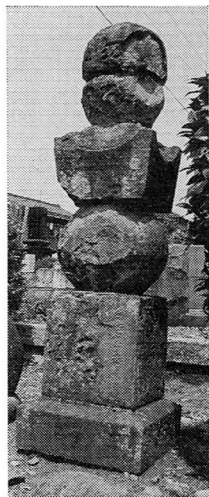
**五輪塔** 五輪塔は宝篋印塔と同じような趣意で、時代も同じ頃の経過をたどっています。この世を構成する五大要素である地・水・火・風・空をそれぞれ象徴して、下部から方形・円形・三角形・半円形・宝珠形の五個の石を積み上げ、各部にその種子(その意をあらわす梵字)が刻まれているのが普通の型です。石造物としての五輪塔は、鎌倉時代から造られはじめられたようです。初期の頃は、堂塔の落慶や仏像の開眼供養などのために造立された記念塔のよ

うなものであったらしいのですが、時の流れとともに宝篋印塔と同じように武士や僧侶の墓石となり、さらに江戸時代の中頃からは庶民でも名だたる人の墓石としても建てられるようになりました。

市内の墓地にも、数多くの五輪塔が見られるのは、小さな集落が福生郷として発展してきた頃庶民の中の名だたる人の墓石と考えられます。個人墓地に多数の五輪塔があるのは、今もその子孫が旧家として栄え、永い歴史を持った貴重な文化遺産と言えます。

**覚圓坊の墓** 内出の共同墓地にあります。銘は□保二乙酉、霜廿六日と読めます。年表を開いて□の中に入るべき文字を調べて「正」を入れると正保二乙酉（一六四五）となり千支も一致するし、型状から推しても江戸初期のものと考えられます。覚圓坊は、真福寺の住職でした。

**長塩の墓** 熊川の地頭であった旗本長塩氏の墓といわれるものが福生院にあります。小型の五輪塔で、銘は不詳ですが、型から推すと江戸中期頃のものとと思われます。



覚圓坊五輪塔  
正保2年(1645)  
(内出共同墓地)

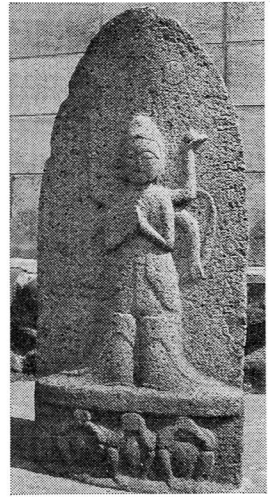
**田沢氏の墓** 真福寺の本堂の裏手にあります。長塩氏と同じように熊川の地頭であった旗本で、武田氏の遺臣で徳川に仕えていました。墓石は、破損して碑銘は判読できませんでしたが、古い五輪塔があります。ここは、墓域全部が市史跡に指定されています。

市内の個人墓地は、大型・中型・小型の五輪塔は数多く見られますが、中には破損のひどいもの、五輪がそろわず寄せ集めて五輪塔の形にしたものなどがあって、判断に苦しむようなものもあります。武蔵野の一集落から福生郷に繁栄の姿を伸ばして来た先人の信仰の跡がしのばれました。中でも、千手院の一墓地にも余る多数の五輪塔が整然としているのを拝するだけで、その家系の古さ、歴史の重みを強く感じました。

**庚申塔** 十千と十二支を組み合わせると六十を周期として、庚申の日が廻って来ます。中国から道教の信仰が日本に渡来して、帝釈天の使者である青面金剛との信仰とが重なり



庚申(文字)塔  
旧宝蔵院墓地台座に三猿



庚申（青面金剛）塔  
長沢薬師墓地台座に三猿

合って、庚申の信仰が拡がり、遠く平安時代から始まったと言われます日待講・月待講などの主尊とされたり、村内に悪病が入るのを除ぐ厄除の主尊にされたりしました。庚申と三猿の関係の説明には、多言を要しますのでここでは省きますが、碑の下部に三猿がいるので、他の石仏との判別を容易にしています。

- 青面金剛像 元禄十二年 清岩院門前  
 全 右 享保十二年 全 右  
 全 右 宝永二年 千手院牛浜墓地  
 全 右 宝永四年 薬師堂前  
 全 右 宝暦八年 加美西公園  
 文字塔 寛政二年 旧宝蔵院墓地  
 全 右 文政八年 薬師堂前  
 全 右 寛政七年 真福寺門前  
 全 右 寛政八丙辰 多摩郡福生郷寒念仏講中  
 黄鐘吉辰 清岩院門前

- 全 右 文政三年 福生院墓地  
 全 右 寛政七年 熊川石川家路角

**萬霊塔** 此の世に生命のあるものの霊を、すべて石塔に宿らせて、それを回向して萬霊を供養するといわれます。塔には、定型はなく自然石などで造ったり、文字塔で墓や路傍などの人目につきやすい所に建ててあります。三界萬霊塔も同じ趣意で市内には十基余りありますが、献花や供物が絶えないのは人々の信仰の奥ゆかしさが感じられます。

- 三界萬霊塔 宝暦五乙亥九日吉日 薬師堂墓地入口  
 為三親菩提也

**萬霊塔（自然石）** 清岩院墓地入口  
**無縫塔** 卵形をしているので、卵塔とも言われます、禅宗の渡来とともに移入されたもので、初めは開山塔などと呼ばれたものが、今は僧侶だけの墓石となっています。神明社南側の墓地に、小型ながらよくととのった卵塔がありました。元禄二己巳天九月十五日、道長堪日上座と銘をよみました。内出墓地にある法印空澄と法印靈山の二基は、小型ですっきりしています。

**筆子塔** 寺子屋に通った寺子（生徒）のお師匠さん（先生）の供養のために建てられたもので、卵塔が多いのは、お師匠さんがお坊さんであったからでしょう。例外が一基

あります。それは真福寺の玄津塔で四角形で銘文に

雖然化縁新尺加入寂依之

筆子檀越合志立塔尊師靈

表報思 志事

当山住 弟子英津謹書

告塔主 筆子

檀越 中

文政七甲申天

とあって筆子塔であることがわかります。これは十年前の調査ですが、今はこの銘は剝脱しています。

一字一石経字塔 写経は本来は、紙に書くものですが、小石に経文の一字を書いて写経を完成し、土に埋めた上に建てた塔で、台座は道しるべにも使われているのを見ると、旅の安全供養などの願意もあるのでしょうか。市内に唯一基、清岩院の山門脇にあります。道しるべの方向が違っているのは、近くから移転したものでしょう。元治二乙丑歳龍居の銘があります。参道の左側に二個の自然石があり、寺ではインメイサマと呼び、この下に今は一字一石の経文が埋められています。

供養塔 いろいろな願意の供養塔があります。紙数の関

係でそれらの個々を紹介できませんが、所在の場所だけ示しておきます。

法華供養塔 (寛政九年丁巳) 清岩院参道

回国供養塔 (天保三年) 福生院境内

心経石段供養塔 (弘化三年) 薬師堂前

寒念仏供養塔 (天明二年) 旧宝蔵院墓地

寒念仏供養塔 (天保二年) 旧宝蔵院墓地

鯖大師 (天保三年) 加美西公園

水神 (自然石) 福生院境内

水神 (自然石) 薬師堂前

水神 (自然石、無銘) 堰上神社境内

見落し、書落しもあるかもしれません。また、未発見のものもあると思います。板碑については今回は取り上げま

せんでした。

せんでした。

参考文献

石仏調査ハンドブック

庚申懇話会

日本石仏事典

庚申懇話会

石仏入門

日下部朝一郎

仏像図典

佐和隆研

庶民のほとけ

頼富本広

私の仏像ノート

武藤辰造

堂塔事典

前 久夫

路傍の神様

川口謙二

(しまだ・ういち 市史編さん委員・牛浜在住)